

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：35305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730752

研究課題名(和文) 絵画表現に躓きを見せ始める子どもの描画発達を促進する教育実践学研究

研究課題名(英文) Research on Educational Practice for the Promotion of Picture Drawing among Children Exhibiting Challenges in Pictorial Expression.

研究代表者

小田 久美子 (ODA, Kumiko)

ノートルダム清心女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：10461229

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、輪郭線を利用した活動の開発を目指し、臨床応用するための検証を行った。まず幼稚園教諭と研究者との連携により造形プログラムを計画立案・実施し、次にデータ整理と分析を行った。結果、鑑賞活動と表現活動が自然に融合することにより子どもの絵画表現への内発性に刺激を与え、その活性化を促す傾向が見られると判断された。

現在まで特に教育的な価値が与えられていなかったが普及率は高く、子どもに好まれる塗り絵遊びに着目し、輪郭線を取り入れた教育実践を検討することは、幼児教育・美術教育において未開拓の領域であると言える。したがって教育現場にとって、新しい指導援助の方法として大きな意味を持ち得ると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research was conducted for developing activities that utilize outlines and to examine their practical application. First, a modelling program was planned and implemented with the cooperation of preschool teachers. Then, data reduction and analysis were performed. The results demonstrated that a natural combination of appreciative and expressive activities stimulated the children's spontaneity for pictorial expression. We concluded that a tendency for encouraging the children's pictorial expression was necessary. Although the use of colouring books has not been particularly attributed much educational value until now, it is an activity loved by most children. Thus, examination of educational practice that incorporates outlines in actual classroom education is believed to be an unexplored area in preschool and art education. Therefore, it has considerable significance as a new method of instructional support in classroom settings.

研究分野：社会科学

キーワード：芸術教育 輪郭線 実践学研究 視覚的刺激

1. 研究開始当初の背景

(1) 博士課程での研究において、輪郭線を用いた造形遊びである塗り絵と子どもの絵画表現との関連性を考察してきた。日本での歴史やそれ自体の構成、そして国内での状況や先行研究の概観を踏まえてどのような影響があるかを考察した結果、子どもの絵画表現における学術的な認識とその社会浸透との構造間にある揺らぎを発見した。子どもを取り巻く環境の中で様々な媒体で接触する機会を得ていながら、美術教育からも幼児教育からも特に顧みられることなく放置され、野放しになっている塗り絵遊びの可能性を視覚的に実証するべきであるという結論に達した。

筆者はこれまでに、輪郭線を用いた造形遊びを効果的に利用することが、子どもにとって教育的意義を持つことを明らかにした。本研究ではこれまでの基礎研究をもとに、就学後教育を見越した教育実践としての、輪郭線を利用した具体的な活動の開発をし、臨床応用するための実践研究を行う。絵画を含む豊かな造形活動は、子ども達の人間性を育むだけでなく創造力を養い、創造力の育成が認知能力の発達を促し、認知能力が思考を促進する。ところが絵画表現に積極的ではない子どもは、年齢が上がるほど増加すると8割以上の保育者が回答している。また、アメリカで1980年代に大きく取り上げられたDBAE(dicipline based art education)も、現在はCAE (comprehensive art education)として形を変えながら定着しつつある。美術の教育から人間形成を包括的に行うというDBAEの概念は日本に「鑑賞教育」という流れをもたらし、最新の学習指導要領には「表現」と「鑑賞」、その共通事項が低学年にも新設されている。そこで子どもの就学前造形遊びの中に輪郭線を応用することで、表現活動と鑑賞活動が無理なく融合される造形プログラムを構築する必要があると考えた。

本研究では、絵画指導において日々試行錯誤している教育・保育現場に、絵画表現に積極的な子どももそうでない子どもも共に楽しく包括的に、幼年造形から就学後の美術教育のねらいにスムーズにつながる新しい方法論を報告する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、就学後教育を見越した教育実践としての、輪郭線を利用した具体的な活動の開発であり、臨床応用するための検証を行うことである。

(1) 研究目的1 幼稚園での実践 1...幼稚園教諭との連携により、美術作品やその鑑賞と、人物・植物・動物の輪郭線を用いた新しい造形プログラムを開発、5歳児のための活動の計画立案をすると同時に、保育者の人的

環境としてのありかた・役割に関する考察を行う。

(2) 研究目的2 幼稚園での実践 2...研究目的1で得られた知見から、美術作品に関連した輪郭線を用いた造形遊びの観察と考察を行う。データの整理・分析によって、子どもの絵画表現の発達的変容を実証することを目指す。

(3) 研究目的3 教育実践方法の構築...検証結果をまとめ、幼年造形教育における新しい教育実践方法論を展開する。そして幼児教育、鑑賞教育と表現教育を統合した創造教育を論究する。

3. 研究の方法

(1) 絵本の導入後に「植物」「動物」「人物」に関する輪郭線のある画用紙(輪郭画用紙)と白色の画用紙を選択する造形活動の調査を実施する。対象者は、大学附属幼稚園児で、分析の視点と分析項目にしたがって年齢別に整理・分析・検証していく。

(2) 同じく附属幼稚園の園児を対象に、継続・縦断的に、美術作品を導入した輪郭画用紙を用いた調査 a~f の造形活動を実施し、その発達的変容と効果について総合的に考察する。

対象:附属幼稚園 年長児 学級(ゆり組 30名、ひまわり組 30名、ばら組 30名)総計 90名

造形遊びと観察:クラスごとに実施する。輪郭画用紙と白色画用紙は、子ども自身が選択できるようにする。画用紙にはあらかじめ名前を書いておく。調査中の対象者の態度、調査への興味など、気づいたことは個人別にまとめておく。対象者の描画への興味を確かめながら、楽しい描画活動であることを徹底する。

効果的に研究を進めるために、各クラス担任から、造形活動にあまり積極的ではない子どもの人数とその対象児についての聞き取り調査を行っておく。

調査 a 自由に絵画表現を行う活動を実施。調査 b 植物に関係した輪郭画用紙を用意し、絵本『葉っぱのきもち』を読み聞かせて、輪郭画用紙か白色画用紙を選択して絵画活動を始める。

調査 c 動物に関係した輪郭画用紙を用意し、絵本『わたしのすきなどうぶつは...』を読み聞かせて、輪郭画用紙か白色画用紙を選択して絵画活動を始める。

調査 d 人物に関係した輪郭画用紙を用意し、絵本『ピーターのいす』を読み聞かせて、輪郭画用紙か白色画用紙を選択して絵画活動を始める。

調査 e V.Gogh の油彩画《“La chambre de Van Gogh à Arles” (ファンゴッホの寝室)》

を子どもと一緒に観てこの絵について話し合い、その後、芸術作品に関連した輪郭線の入った輪郭画用紙と白色画用紙を選択して絵画活動を始める。

調査 f 自由に絵画表現を行う活動を実施。

描画材料:16色パス 八つ切り画用紙

設定した分析の視点と分類項目にしたがって、結果を整理する。

(3) 調査実施によって明らかになった結果により、緻密なデータの上に立脚した教育実践方法を論述する。本研究によって得られた知見から、実証資料にもとづく原著論文を執筆し、学術雑誌に積極的に発表することによって、我が国の美術教育・幼児教育研究、保育者養成・教育実践学術研究の発展に寄与することを目標とする。

4. 研究成果

3つの輪郭線が、5歳児の絵画表現にどのような影響を及ぼすのかを比較・検討した結果、特に絵を描くことに消極的な子どもにとって、輪郭画用紙は活動の手がかりとなり、初回に行った自由画に表れたものよりもより豊かに自分を表現する傾向にあることから、輪郭線を緒として表現の幅が広がることが明らかになった。子どもたちが数回に亘って納得のいくまで輪郭画用紙を選択して絵画活動をすることで、絵画表現の体験は蓄積される。輪郭線を適切に利用することで、絵を描くことに躊躇し始めた子どもを含め、少しずつ絵画活動から遠ざかっていく子どもへの新しい教育実践の方法を提示できる点、絵を描くことに逡巡する子どももそうでない子どもも一斉に共に活動できる点で、意義は大きい。

さらに、2タイプ5種類の造形遊びによって構成された教育実践プログラム検証の結果、視覚的刺激の役割を果たす輪郭画用紙によって、「輪郭線を提示する」という表現活動に直接働きかける手段だけでなく、実践学術研究の観点から造形活動を活性化させる支援の可能性が示唆された。

視覚的刺激だけでなく、子どもたちが絵画を観て、思ったことや考えたことなど色々話し合うことで、言語的な刺激も加わる。子どもの表象活動の発達を支えるものが、言語の獲得とイメージ想起の相互作用である限り、絵画表象の活性化を助けるには、言語活動とイメージの見立ては創造性への不可欠な要素である。

本研究は、子どもの絵画表現へのインスピレーションの移行やストーリー性確立の容易さなどから、オランダの画家 Gogh による絵画を導入作品に選出したが、日本の美術作品や地元ゆかりのある芸術作品を応用し、プログラム構築をすることで、子どもたちにとって魅力ある環境を構成していくことが出来るという柔軟性をもっていると言え

る。子どもが身近に感じ親しみを持っている芸術作品を鑑賞したり触れたりすることも出来る素材を用いれば、気づきや感動を諸感覚と働かせて楽しむ幅が、より広がると考えられる。

芸術作品を無理なく段階を追って取り入れることで、美術を特殊で専門的なものとして見るのではなく、子どもの日常生活の中での経験に溶け込んだものとして見つめ直すことが出来る。

今後も継続的な研究成果の公開を通じて、子どもたちの描画発達に対する支援の端緒となり、一助となることが出来るよう努めていきたい。

引用文献

小田 久美子, 芸術作品の導入を緒に考察する絵画的表象の位相, 大学美術教育学会『美術教育研究』(ISSN 0911-5722), 47号, 2015年, 103-109頁

小田 久美子・高橋 敏之, 3つの輪郭線が及ぼす絵画表現への影響と比較, 日本美術教育学会学会誌『美術教育』(ISSN 1343-4918), 298号, 2014年, 8-14頁

小田 久美子, 風間書房, 『塗り絵と子どもの絵画表現の発達の発容』, 2014年, 全191頁

小田 久美子, V.Gogh “La chambre de Van Gogh à Arles” を用いた絵画プログラムの検討と意義, 日本家庭教育学会『家庭教育学研究』(ISSN 1342-3916), 18号, 2013年, 37-44頁

小田 久美子・高橋敏之, Comprehensive Art Education を意識した幼年造形カリキュラムに関する研究, 『発達研究』(ISSN0916-1422), 26巻, 2012年, 39-50頁

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

小田 久美子, 芸術作品の導入を緒に考察する絵画的表象の位相, 大学美術教育学会『美術教育研究』(ISSN 0911-5722), 査読有, 47号, 2015年, 103-109頁

小田 久美子・高橋 敏之, 3つの輪郭線が及ぼす絵画表現への影響と比較, 日本美術教育学会学会誌『美術教育』(ISSN 1343-4918), 査読有, 298号, 2014年, 8-14頁

小田 久美子, V.Gogh “La chambre de Van Gogh à Arles” を用いた絵画プログラムの検討と意義, 日本家庭教育学会『家

庭教育学研究』(ISSN 1342-3916), 査読
有, 18号, 2013年, 37-44頁

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計1件)

小田 久美子他, 学文社, 『新障害のある
子どもの保育実践』, 2014年, 全 181
(101-108)頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小田 久美子 (ODA, Kumiko)
ノートルダム清心女子大学・准教授
研究者番号: 10461229

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: